



読者からの声

石川医報の「読者からの声」は、会員がいろいろな意見を交換する場です。
ぜひ、皆様からのご意見、ご投稿をお待ちしております。
(編集部より)

女性医師の窓

医師として4年間働いた中で感じること

国立病院機構医王病院 神経内科 島 綾乃

まさか私のような医師として駆け出しの者がこのような原稿のご依頼をいただくとは、非常に驚いております。

私は卒後4年目の神経内科医です。今年から金沢市にある神経難病専門の慢性期病院である国立病院機構医王病院に勤務させていただいています。

さて、私が神経内科を選択したきっかけとして、祖母が頸椎症性脊髄症で入院したエピソードがあります。私が大学生の頃、祖母が急に立てなくなり、神経内科に入院することになりました。初めは原因が分からずランバレー症候群や神経変性疾患が疑われ、家族一同ショックを受けた時もありましたが、最終的には頸椎症性頸髄症の診断で手術を受け歩行が可能となるまでに改善しました。診察所見や検査結果をひとつひとつなぎ合わせて診断をひねり出す“神経内科の診断学”に興味を持ったとともに、「歩けなかった人が歩けるようになり、再び“その人としての生活”を再開できるようにする仕事」というのは素晴らしい仕事だと感動しました。神経内科に入り診療させていただくと、診断はもちろん、治療の選択や評価等すべてのことが難しく、迷走しながら途方に暮れることばかりでした。しかし、そこが神経内科の醍醐味・やりがいであるとも思っており、知識と経験を養う為日々修行中です。

そして現在の病院に勤務し、治療法のある人もない人も、「診断の後、どういう生き方を希望し、その為にはどう手助けすれば良いか」ということの大切さを日々感じております。神経内科の分野は現在の医学では根本的治療ができない疾患が多いのが現状です。これまでの4か月間で数名のご臨終に立ち会わせていただきました。一言で簡単に言ってしまうと「徐々に衰弱して死に至る」経過ですが、それまでの間にいくつもの選択肢があり、ドラマがありました。徐々に体の自由が利かなくなる過程で、その時々のご本人・ご家族の希望があり、それをどうやって実現させられるかということに全力を注いでいるつもりです。

現在私の祖父もレビー小体型認知症の薬剤調整目的に医王病院に入院中で、なんと私が主治医をさせていただいております。祖父は「ぼけて何もわからなくなったら綾乃ちゃんにみてもらっちゃ」と常々言っておりましたので、祖父孝行はできているのかなと思っております。しかしながら、主治医兼家族というのはやはり非常に難しく、家族としての不安や迷いといった感情が混在してしまい、方針がブレブレになってしまいそうになる時もあります。それでもなんとか大先輩の先生方や看護師さん、ソーシャルワーカーさんにご相談させていただきながら、そしてもちろん子供である両親とも相談しながら、(正解がないことは分かりますが、それでも)祖父にとっての最善を目指しています。医者視点と家族の心の両方がわかる貴重な機会を与えていただいたと、病院に、そして祖父に感謝しております。

1人の娘として、孫として、妻として、そして医者としてこの先何を選択し、どう生きていくかを考えることも多い今日この頃です。命の始まりである出産や子育てと同じくらい大切な“生き抜いた末にどう終わるか”“家族の終わりにどう付き添うか”を常に考えさせてくれるこの職場で、これからも経験を積んでいきたいと考えております。